

## ☆石巻通信第1号（08年1月22日）

### ★さかな町のリスクとは

朝日新聞石巻支局。  
この職場兼住居に移って10日あまり経つ。「さかなの町」として知られるが、それだけではない。南側の窓から外を見ると、大きな煙突群が昼でも夜でも、モクモクと真っ白い煙を吐いている。日本製紙の主力工場がここにあるのだ。



朝日新聞石巻支局。手前がオフィスで奥が住宅になっています。車庫にはスバル・インプレッサが入ってます。四輪駆動スタッドレスタイヤ装備です。

同社が年賀再生はがきの再生紙の比率を契約よりも大幅に下げていると発表したのは、赴任した日のこと。はがきは熊本県の八代工場生産されたと聞いたので、わが管内じゃないとほっとしたが、数日後には、コピー用紙などでも再生紙の比率を「偽装」していたと報じられた。

それなら、ここの工場でも「偽装」をやっていたのだろうかと思っていれば、早速、本社経済部の業界担当記者から、そちらの様子はどうですかと尋ねてきた。「相変わらずモクモク煙を出してます」と答えたものの、これでは取材ではなく目測だ。石巻工場に電話を入れてみると、いまのところ生産に変化はないとのこと。目測があっていたのかどうか、もう少し調べてみないと……。

新聞記者はセールスマンと同じで、「間に合ってます」と言われてからが勝負。ドアが閉まるのを隙間に靴を履きながら、押しの手で迫るのだ。そんな教訓を後輩に垂れていたのだが、自分が取材する身になると、ドアの隙間に靴を入れるどころか、入り口のドアホンまでしかたどり着いていない感じだ。

わが管内の全国銘柄は、日本製紙の工場だけではない。隣の女川町には、東北電力の女川原子力発電所がある。支局のロッカーをあけたら、原発事故を取材するときにする用具の入ったリュックサックがあった。なるほど、そういう取材もするのかと思いながら、中身を調べてみると、ポケット線量計、サーベイメーター、ヨード粒、吸塵フィルター、防護マスク……。

会社がつくった指針によると、ガンマ線の被曝線量は100マイクロシーベルトが「目安」と書いてある。この「目安」を超えて値がどんどん上昇するようなら、ただちに待避とある。どんな状態なのか想像もできない。台所にあるマイクウェーブに線量計をかざして、スイッチを入れてみたが、線量計の数値はゼロをさしたままだった。

明日から2日間、県と女川町と石巻市が合同で、「原子力防災訓練」を実施する。原子力災害対策特別措置法に定められた10条（放射線量の異常）事態が15条（原子力緊急事態）事態になったと想定した訓練で、住民の一部も避難訓練に参加するそうだ。住民待避の写真を撮ろうと思っているが、本番になったら、線量計を首にかけて、逃げまどう人々を撮るのだろうか。



原発事故を想定した住民の避難訓練。白衣が不気味です。放射線の測定器は支局にも装備されています。

日本製紙の取材リスクは、せいぜい特オチで、わが記者生活では慣れたものだが、原発リスクに慣れているわけではない。01年の9・11では、米国に駐在していたから、原発が爆破されるリスクを考えていた。対策は、風向きが海に向いていれば大丈夫だが、陸に向いていればひたすら逃げるしかないというものだった。

しかし、今度は女川原発ウォッチャーだから、大事故が起きれば、女川町にある原子力防災対策センター（原発から約8キロ）を拠点とする前線本部に詰めることになるらしい。そんなことにならないよう願うばかりだ。

昨日は、航空自衛隊の松島基地からファクスが入っていた。三沢基地所属のF 2の操縦桿に「特異な不具合」があったそうで、松島基地のF 2も飛行を見合わせているとのこと。そういえば、この基地がある東松島市もわが管内だった。ここに赴任して驚いたのは、ジェット機がやけに低空飛行で飛んでいることだ。聞いてみると、松島基地にはブルーインパルスが所属しているとのこと。当然ながら、その訓練もこの空域で行われているわけだ。

今朝の新聞を見たら、「特異な不都合」とは、操縦桿が折れたことだった。無事に帰れたからいいようなものの、危ない話だ。

この港町も周辺まで目を広げれば、さまざまなリスクが潜在している。そして、そのリスクが顕在化したときに、できるだけ早く現場に到着して、写真を撮り原稿を送ることが、ここの記者に課せられた最大の任務ということになるのだろう。おいしいさかなばかりに目を奪われているわけにはいかない！

(高成田享)